

第19回アジア政経学会優秀論文賞選考理由

優秀論文賞選考委員会 三重野 文晴

本論文は、フィリピンにおける競争法導入のプロセスに着目して、それがベニグノ・アキノ三世政権下で成立に至る要因を考察することで、アキノ政権の経済ビジョンや経済政策の位相を考察したものである。

論文は、まずアキノ政権が持った経済改革構想の特徴が、インフラ開発が牽引する「包摂的成長」の推進とその基礎となる財政改革の重視にあるとし、その改革構想のもとで、競争問題の現状を「包摂的成長」の阻害要因として捉えていたことを指摘する。その上で、戦後議論されながら不徹底に終始してきた競争法制がこの政権下で成立した背景要因を、政策当事者へのインタビューを含む資料収集による堅実な実証によって明らかにしている。

アキノ政権は、貧困層、中間層が主導する市民社会組織に基盤を持ちつつ、他方で財閥や軍部と比較的友好な関係を維持していた。その基礎環境のもとで、競争法を成立させ得た要因が、(1)「包摂的成長」や中小企業育成を重視する政策ビジョンを基軸に据え、中小企業や市民社会からの提言を活用して法案の詳細をまとめてきたこと、(2)政権のビジョンを共有する議員が強いリーダーシップを発揮して反対勢力との妥協に成功したこと、そして(3)潜在的な反対勢力の財閥が、実は既に海外進出下で国際競争を経験して公正な競争環境の必要性への理解を進めていたこと、などにあるという。さらに、このような政治経済環境を考察することで、アキノ政権の経済政策ビジョンがアロヨ政権への対抗として登場してきたこと、一方で、一見相反する政策が目立つドゥテルテ政権も、実はこの点ではアキノ政権とビジョンを共有しつつあり、フィリピンにおいて経済環境の認識に不可逆的な変化がおきていることを、見いだしている。

本論文は、あくまで政治学としてアキノ政権の特徴を分析する立場に立ちながら、競争法という経済学、法学への広がりをもつ題材を選び、それらの諸要素に目配せをしながら、主題についての一定の結論を導き出すことに成功している。現実を解きほぐすために必要ではあるものの、接近の難しさから避けられることの多いこうした学際的な論点にあえて取り組んだ課題選択と、それによって新しい知見を導き出した成果は、若手研究者の挑戦として高く評価されるべきものであり、優秀論文賞にふさわしい。

ただし、政治学的な分析手法の堅実さに比して、経済面では、中小企業問題の評価や、国際的な価格競争力と独占問題の関係などの経済学的な観点について整理が不足するという指摘や、法学の観点から、競争政策の国際的展開について触られていないという指摘もあった。これらは挑戦的なアプローチであるがゆえに喚起される課題であろう。今後の研究の展開に期待したい。

受賞の言葉

原 民樹

このたびは、アジア政経学会第19回優秀論文賞をいただくこととなり、たいへん光栄に思います。博士課程に長く在籍しながら、まともな成果を出せなかった私にとって、とても大きな励みになります。選考委員の先生方、査読を担当してくださった先生方、編集委員の先生方に深くお礼申し上げます。

今回の論文は、2015年のフィリピン競争法成立の要因を分析したのですが、私は競争政策に特別な関心があるわけでも、経済政策を研究対象にしているわけでもありません。それにもかかわらず、なぜ競争法に関する論文を書こうと思ったのかを振り返ってみたとき、産業組織論がご専門の越後和典先生が1965年に書かれた『反独占政策論—アメリカの反トラスト政策』という本が導きの糸になったのだと思います。同書には次のような指摘があります。「現代国家の採用する独占対策の型の相違は、その国の階級関係・政治勢力の消長、産業構造の特殊性、大衆の社会心理の特徴、あるいは世界資本主義の動向等の要因によって左右される相対的なものであり、理論的にその是非・優劣を判定しえないものとする。われわれにとって重要なことは、独占対策の型の優劣ではなく、むしろ右の要因と特定の独占対策の型との関連性を明らかにすることにあるように思われる」。今回の論文は、ここに提起されているすべての要素に論及できたわけでもありませんし、フィリピン競争法がどのような「型」に類別できるのかを明確にできたわけでもありません。しかし、私はこの指摘から、一般的に経済学や法学において研究される競争政策を政治学から考えてみることの重要性を教えられると同時に、競争政策がその国の政治経済構造の骨格をなす諸要素に規定されながら形成されるということに気づきました。これは逆に言えば、競争政策を見ることにより、その国の政治経済の輪郭や特徴をつかむことができるということになります。大学院生時代は、狭く限定されたテーマから出発せざるをえませんが、これを社会的に意味のある成果に育てていくには、「特殊」を通じて「普遍」に至る道を探し出さなければなりません。越後先生の研究は、この「特殊」と「普遍」を媒介するひとつの道を示してくれるものであり、競争法を見ることはフィリピンの政治経済の全体像を理解するうえでとても重要だと背中を押してくれたように思います。

私がこの論文のなかでもっとも価値があると考えているのは、フィリピン競争委員会初代委員長のアルセニオ・バリサカン氏にインタビューできたことです。先月、フィリピンの新しい大統領に当選したマルコス・ジュニアは、バリサカン氏を国家経済開発庁長官に任命し、経済政策の舵取りを任せると発表しました。アキノ政権期の2012～2016年にもバリサカン氏は同じポストで働いており、本論文であつかった「包摂的成長」路線を提起した中心的人物でもあります。本論文は、「包摂的成長」路線に代表されるアキノ政権の政策枠組みがドゥテルテ政権にも継承されていることを示唆していますが、バリサカン氏の人事に見られるように、今月末に発足するマルコス政権にもこれが継承されることは間違いないと思われます。論文に書いたように、アキノの改革政治の方向性は、アキノ政権期にとどまらない中長期的な射程をもつという考えは、いっそう説得力を増していくと思います。新しいマルコス政権が何に取り組もうとしているのかを考える際にも、この論文を参考にいただければ幸いです。ありがとうございました。